

熊本市上南部遺跡出土の組織痕土器について

The pottery made by the plastering clay inside the baskets excavated at the Kaminabe Site in Kumamoto City

渡辺 誠 (WATANABE Makoto)¹⁾

1) 名古屋大学名誉教授
Emeritus Professor of Archaeology, Nagoya University

Abstract

While most of the Jomon potteries were made by the ring building method, some of them were manufactured by the plastering clay inside the baskets. They show the marks of the imprints of their textures. This type of pottery was characterized by the Latest Jomon Period in Kyushu.

The excavation of the Kaminabe Site in Kumamoto City yielded 25 specimens. Their imprints marks are the baskets (7), the knitted clothes (4), and nets (14). The usage of the knitted clothes and nets on the baskets was probably to separate them from the baskets easily.

I 組織痕土器の重要性

組織痕土器は、縄文時代晩期の九州地方にのみみられる特徴的な土器である。これを第1の特徴とし、さらに三つの特徴がある。

その第2の特徴は、縄文土器が一般的に輪積み法によって作られるのに対し、組織痕土器は型取り法によって作られることである。第3は、型離れ材としての各種の組織圧痕が、顕著にみられることである。そして第4は、作られた器形は浅鉢形土器が多く、かつ大型であることである。

研究上は、大型浅鉢が何故九州地方でのみ必要とされたか、ということの解明が主要課題である。同時に軟質素材のため遺存することの少ない各種の組織の解明も重要な課題である（渡辺 1991）。

幸い本遺跡では大型破片で、圧痕も明瞭な資料に恵まれている好資料が多いので、熊本市立博物館のご好意によって、若干の検討を試みることにした次第である。

II 本遺跡出土資料の検討

本遺跡は熊本市東部に位置し、白川によって開析された河岸段丘上に立地している。1978・79年に熊本市教育委員会によって発掘された縄文時代晩期の遺跡である（富田 1978・79）。そして組織痕土器はA地点より4点、C地点より10点出土しているが、さらにC地点では圧痕の顕著な粘土塊も3点出土している。ただし例数も少ないので、本稿では地点別とはせず、組織の種類別に記すことにする。

本遺跡でみられる組織痕は、型自体に由来する網代圧痕、型離れ材に由来する編布・網の圧痕の3種類である。次にそれらについて、個別に記す。

A) 網代圧痕 A地点より3点、C地点より4点出土。

第1例（写真1-1）口縁部破片で、破片の下部には、型であるカゴの口縁部圧痕がみられる。幅約41mmの材で、縁巻きが行なわれ、また同様な材数本が縁の芯に使われていることが分かる。なお7cm無文帯は、カゴで型取りすることに加え、その上部に輪積みを行なって、カゴのままだと高

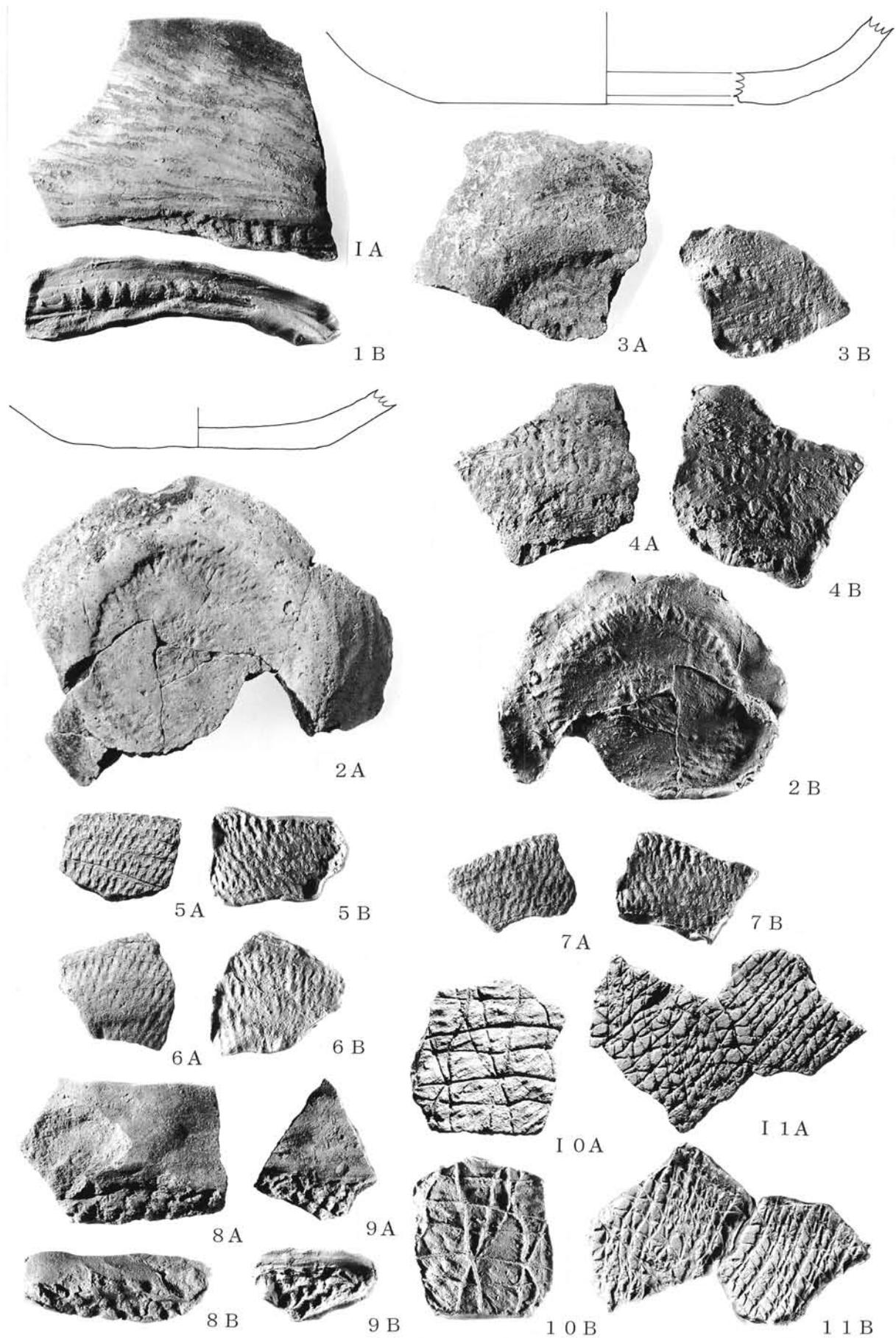


写真1 組織痕土器写真1 (1~8:網代, 4~11:網。Aは土器片, Bは同モデリング陽像。縮尺:2分の1。以下同じ)

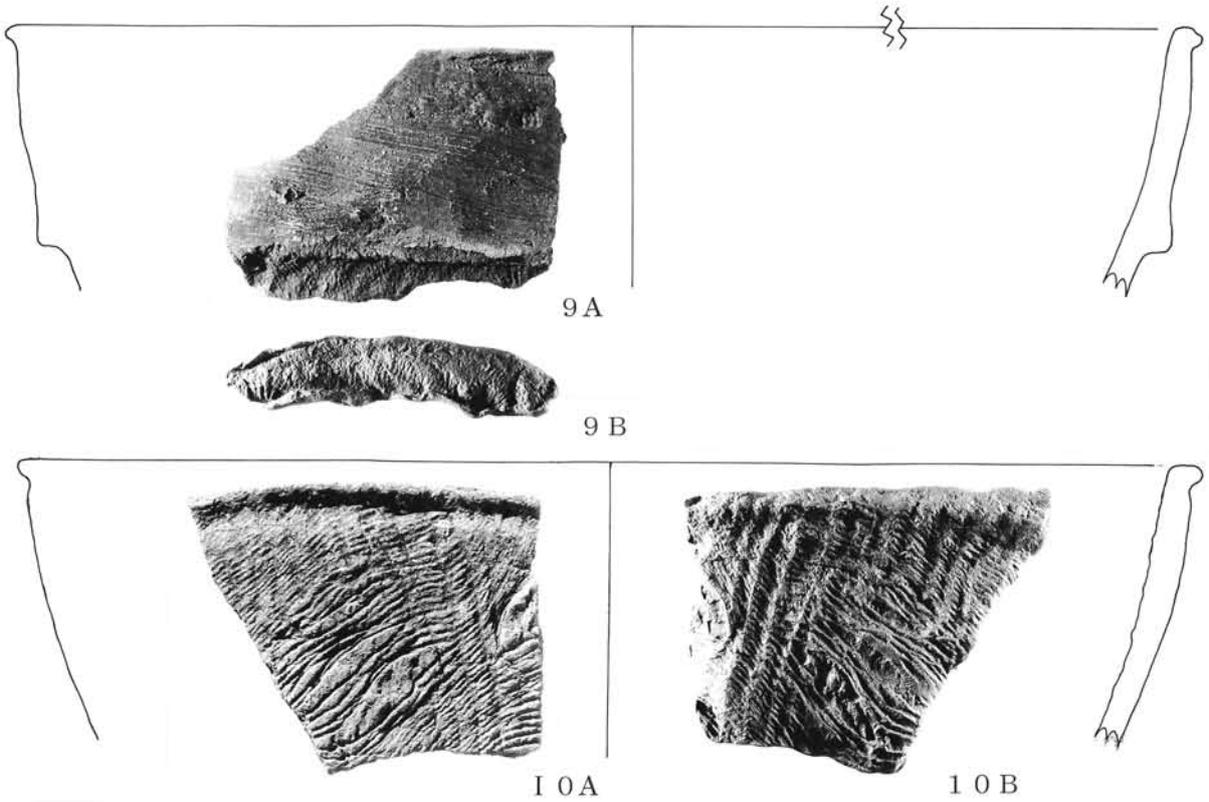
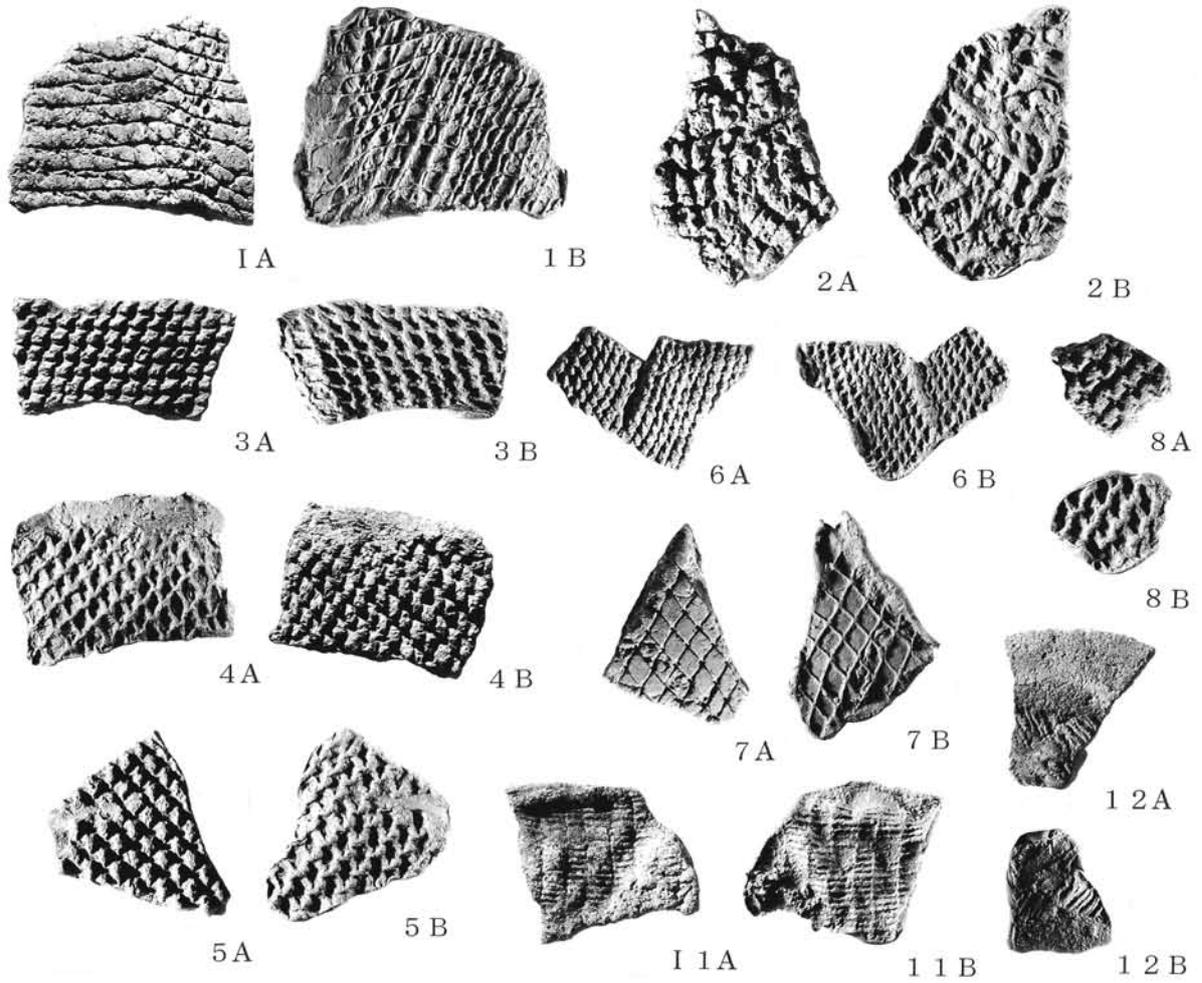


写真2 組織痕土器写真2 (1~8: 網, 9~12: 編布)

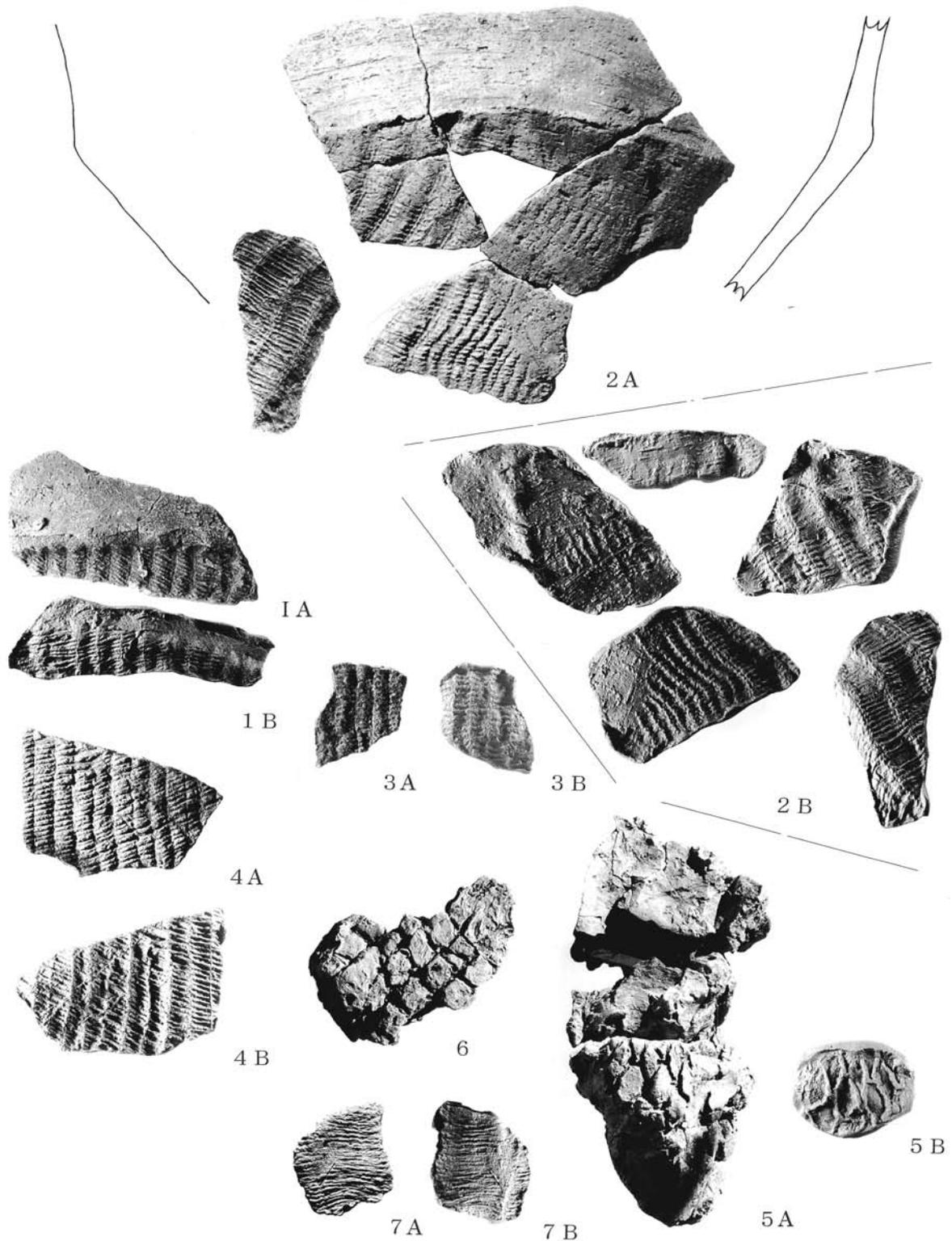


写真3 組織痕土器・粘土塊写真3 (1~4・7:編布, 5・6:網)

さが不足するために、口縁部を直立させていることを示している。

第2例(同2) 直径9.4cmの底部破片で、約80%が残っている。型であるカゴの底径は7cmで、立ち上がり部分の圧痕は顕著であるが、底面全体は不鮮明である。この底径からみて、口径は30cm以上あったと推定される。

第3例(同3) 直径12.0cmの底部小破片である。

第4～7例（同4～7） 胴部の小破片である。組織は上記例を含め、「一本越え、一本潜り、一本送り」で、密接するタテ材に比べ、ヨコ材はやや開きがある。

B) 網目圧痕 C地点より12点、粘土塊の2点が出土。

第1例（写真1-8） 胴部と口縁部にまたがる破片。

表1 網目圧痕計測値一覧表
(計測部位は図1参照, 単位: cm)

番号	写真番号	a	b	c
1	1-8	0.8	0.7	0.6
2	1-9	0.9	0.6	0.5
3	1-10	3.0	2.2	1.9
4	1-11	1.0	0.7	0.6
5	2-1	1.1	0.6	0.6
6	2-2	1.1	0.8	0.6
7	2-3	0.8	0.5	0.5
8	2-4	0.8	0.6	0.5
9	2-5	0.9	0.6	0.6
10	2-6	0.6	0.4	0.3
11	2-7	1.0	0.7	0.6
12	2-8	0.9	0.7	0.6

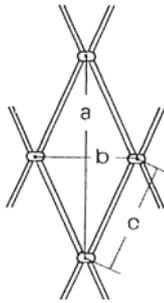


図1 網目の計測部位

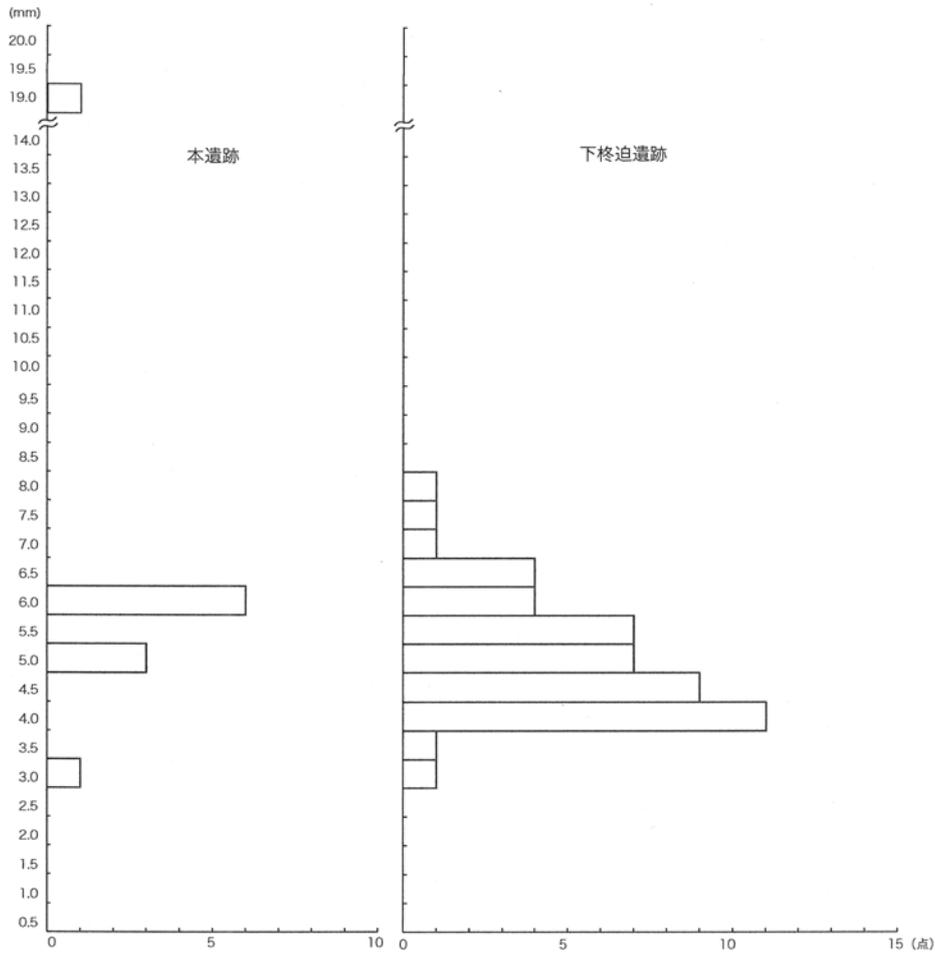


図2 網目サイズ(c)の比較

第2例(同9) 同様に胴部と口縁部にまたがる破片。

第3例(同10) 胴部破片。他資料に比べて本例のみ目が粗く、隙間に型の網代圧痕がみられる。

第4例(同11) 胴部破片。使用時のズレで、圧痕が二重に重なっている。

第5例(写真2-1) 胴部破片。同様に、圧痕が二重に重なっている。

第6例(同2) 胴部破片。同様に、圧痕が二重に重なっている。

第7例(同3) 胴部破片。次の第8・9例は、網目の大きさ、土器片の厚さ・色調からみて、同一固体の破片と考えられる。

第8例(同4) 胴部破片。

第9例(同5) 胴部破片。

第10例(同6) 胴部破片。本遺跡例では、もっとも網目が細かい。

第11例(同7) 胴部破片。

第12例(同8) 胴部破片。

C地点よりは、他に粘土塊についた次の網目圧痕が2点みられる。

第13例(写真3-5) 長さ13.5cm、幅6.5cm、厚さ5.8cm。良質の粘土を運んだ袋であったと考えられる。

第14例(同6) 同様の小破片。長さ7.0cm、幅4.5cm。

網目の計測部位は、図1に示すとおりで、その結果は表1に示す。計測部位のうちa・bは伸縮があり、他遺跡例との客観的な比較を可能にするため、cで代表させて示すこととする。その結果は図2左にみられるように、5～6mmの範囲に集中している。しかし離れて19mmという粗い目もあり、本来の漁網としては、二つ以上のサイズがあったことを示唆している。しかし型離れ材としては、目の粗いものの利用価値は低いので、網目圧痕から漁網を論じることには限界がある。

なおこれを鹿児島県出水郡高尾野町柵迫遺跡(渡辺2005)の54例と比較すると、下柵迫遺跡では4.5～6.5mmの範囲に集中していて、本遺跡の数値を包み込んでいる(図2右)。目の細かい網目については、これらのサイズが標準的かもしれないが、今後さらに他遺跡例を含めて検討していきたい。

C) 編布圧痕 A地点より5点出土。C地点より粘土塊の1点出土。

第1例(写真3-9) 直径約33cmの口縁部破片。幅5.5cmの輪積みによる無文帯の下部に、型の上端に敷かれていた編布圧痕がみられる。その目が傾斜しているのは、型であるカゴの口縁部における縁巻きを、反映しているとみることができる。

第2例(同10) 直径約31cmの口縁部破片。輪積みによる無文帯が欠如している。

第3例(同11) 第2例と同じ小破片。

第4例(同12) 底部の小破片。

第5例(写真3-1) 胴部と口縁部との境界付近の小破片。

第6例(同2) 胴部と口縁部との境界付近の破片。本例の重要性は、一枚の編布中にサイズの異なるタテ糸の間隔が、連続して2種類みられることである。左の粗い目は12mm、右の細かい目はその

表2 編布圧痕計測値一覧表(単位:mm)

番号	写真番号	タテ糸		ヨコ糸	
		傾き	間隔	撚り	間隔
1	2-9	?	?	?	?
2	2-10	?	5.5	Z	1.4
3	2-11	左	6.0	?	1.7
4	2-12	?	1.0	?	1.4
5	3-1	?	7.0	?	1.4
6	3-2 a	左	1.2	Z	1.7
	3-2 b	左	3.0	Z	1.7
7	3-3	?	7.0	?	1.7
8	3-4	左	6.0	?	1.4
9	3-7	右	18.0	Z	1.3

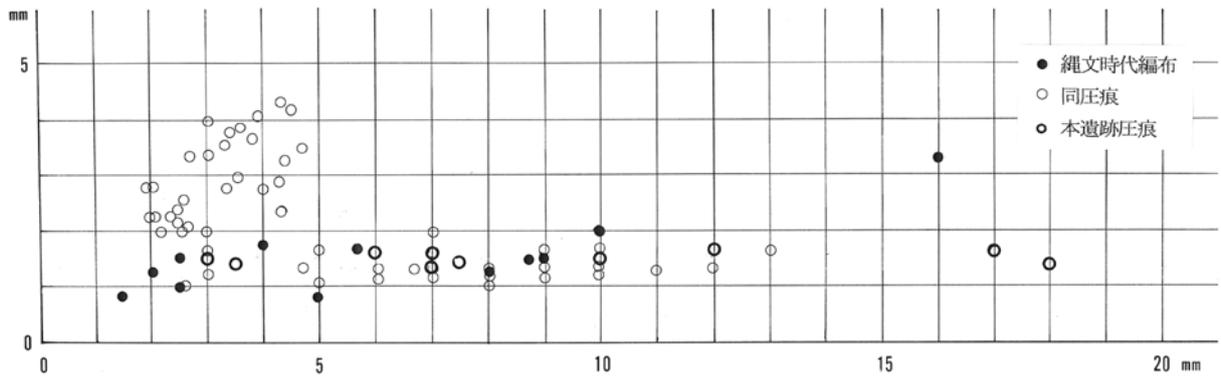


図3 縄文時代編布・同圧痕と本遺跡圧痕のヨコ糸・タテ糸のサイズ

半分以下の0.5mmである。本来どのような目的で編まれた布なのか、興味深い。

第7例（同3）胴部破片。

第8例（同4）胴部破片。

第9例（同7）粘土塊の小破片。高さ3.6 cm、幅3.2cm。タテ糸の間隔が18mmで、他例に比べて極端に広いのが特徴的である。

以上の編布の計測値は、表2に示すとおりである。なお数値に客観性をもたせる意味で、タテ糸・ヨコ糸とも共に糸間の隙間の数値ではなく、糸の中心間の数値で示す。またタテ糸欄の傾きは、2本で編まれるためにできる粒の傾きであり、ヨコ糸欄の撚りは、右撚りと左撚りの概念が混乱を避けて、みせかけの糸の傾斜をそのまま示すために、SとZで右下がりりと左下がりとを表している。

その間隔をみると、ヨコ糸は1.3～1.7mmで大きな差はないが、タテ糸の間隔には大小がある。それらには、5mm以下の細密な例が3例、5mm以上の粗い例が5例みられるが、第6例のように両方にまたがる例も1例みられる。なおこれらを他遺跡例と比較すると大差はない。ただし5mm以下の細密な例において、ヨコ糸の間隔が広がることはない（図3）。

Ⅲ おわりに

以上の各組織の検討の他に、口径の分かる例が2例みられたことも重要である。型取り法による組織痕土器ははじめに記したように、大型の浅鉢形土器を作るために発達したものである。そしてその機能と起源地を明らかにするためには、各遺跡において普通の浅鉢形土器とのサイズの比較検討が重要であり、それらの積み重ねの上にその解決を目指していきたいと考える。

謝 辞

本稿をまとめるに際し、多くの方々より多くの御教示と御協力を頂いた。末尾ながら御芳名を銘記して、深謝の意を表する次第である（敬称略）。

池畑耕一・坂本経昌・島津義昭・富田紘一・東 和幸・美濃口紀子・吉田泰幸・吉本洋子・熊本博物館。

引用文献

渡辺 誠（1991）組織痕土器研究の諸問題。交流の考古学。熊本。213-232。

——（2005）下柵迫遺跡出土の組織痕土器について。下柵迫遺跡・高尾野町埋蔵文化財発掘調査報告書。鹿児島県高尾野町。115-125。

（2006年11月10日受付，2006年12月10日受理）